

※本資料は、一般社団法人 教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

孔子廟堂碑

動画「孔子廟堂碑の用筆」「天河」
別冊硬筆ワークシート P3・4

別冊毛筆ワークシート P1～5

教材研究

作品について

概要

唐の第二代皇帝・太宗（李世民）は、武徳九（六二六）年に即位すると、弘文館を置き、博学の者を弘文館学士（貴族や高官の子弟の指導教官）に任命し、ともに学問と政治を論じた。これが後世「貞観の治」とよばれる優れた文治政治の始まりである。

隋末の混乱を武力で平定した唐の成立からわずか八年、兄と弟を玄武門の変により殺害し、父の高祖を幽閉して即位した太宗にとって、武断政治から文治政治への転換は、最も重要な課題であった。

文治の根本は儒教にあるが、当時、唐の都・長安には、儒教の祖である孔子を祀る廟がなかった。そのため太宗は、貞観二（六二八）年、最高学府である国学内にある孔子廟の再建を命じ、勅命により弘文館学士の虞世南（五五八～六三八）に記念碑の銘文を撰文・書写させた。これが「孔子廟堂碑」である。虞世南が七十一～七十三歳頃の作と推定される。

書かれている内容

儒教の祖である孔子と、その教えのすばらしさを説き、儒教が重んじられない現状を嘆いた太宗が孔子廟を建立したことの意義を説いている。つまり、「孔子廟堂碑」は、太宗の儒教による文治政治の本拠地完成を世に宣布した記念碑といえるだろう。

原石・拓本について

元の虞堪『聞定陶河出孔子廟堂碑序』によると、「孔子廟堂碑」の原刻は、わずか数十の拓本を採り近臣に賜った後、不幸にも廟が火災

に遭い、亡失したという。その後、陝西本・城武本をはじめとする重刻・翻刻が多く作られ、これらを原刻と誤認する人もいた。

教科書掲載の「唐拓孤本（臨川李氏本）」は、現在、三井記念美術館に収蔵されている。これは、清の翁方綱（一七三三～一八一八）が、元の周伯琦・康里傳脩、清の安岐の手を経て、李宗瀚（一七七〇～一八三二）の蔵品となっていた旧拓を、貞観の原刻と審定したものである。ただし、全文二千七十字中、唐刻は千四百四十六字で、そのほかは陝西本・城武本で補っているという。この説には反論もあるが、現存最古にして最高の拓本であることは疑いない。

筆者について

概要

虞世南は、字を伯施といい、浙江省余姚県の出身である。物静かな性格で、学問への志が深く、幼い頃から兄の虞世基と共に呉郡の顧野王に学び、陳・隋に仕えた。隋を滅ぼした宇文文化及が虞世基を殺そうとした際には、号泣して身代わりになることを申し出たが聞き入れられず、深く悲しんだという。宇文化及が竇建徳に敗れ、竇建徳が李世民（後の唐の太宗）に滅ぼされた後には、李世民に人柄と学識を認められ、唐で重用された。秘書監（皇帝秘蔵書物の管理長）・弘文館学士・永興県子（爵）を歴任した。

唐の劉餗『隋唐嘉話』によると、太宗は、虞世南には、博聞・德行・書簡（書道の名人であること）・詞藻（詩文に優れていること）・忠直の五つの抜きん出た点があるとたたえ、その没後、二人としない学術

の士であったと嘆いたという。また、虞世南は、王羲之七世の孫である智永に書を学び、その書風を継承したと伝えられる。

清の孫承沢『庚子銷夏記』によると、太宗は貞観四（六三〇）年、「孔子廟堂碑」が完成し、拓本が進上されると、王羲之が身につけていた「右將軍会稽内史」黄銀印を虞世南に賜ったという。

虞世南の他の作品

「汝南公主墓誌銘稿」「破邪論序」「積時帖」「左脚帖」「蘭亭序八柱第一本（張金界奴本）」などの作が伝えられているが、いずれも後世の臨模または仮託とされている。また、筆者名のない「昭仁寺碑」を虞世南の書とする説もあるが、確証はない。

指導のポイント

指導上の留意点・書風について

●前述のように「孔子廟堂碑」は、太宗が、最重要政策であった儒教による文治政治推進の本拠地完成を記念して建てた碑である。そのため、この碑は当時最高の書人が最高の書技を発揮した作品であるということをも、導入として認識させるとよいだろう。

●この作品には「変化の妙」が多く盛り込まれていながら、見た目には極めて整然としており、これが楷書の最高傑作の一つに数えられるゆえんである。鑑賞の際にはこの点を指摘し、「変化」と「整然」の両立について考えさせるようにしたい。

●欧陽詢の「外剛内柔（外面は剛毅で内面は柔軟）」の書風に対し、「外柔内剛（外面は柔軟で内面は剛毅）」の書風と評され、その温順な趣が高く評価されている。

拓本について

●多くの生徒にとって、拓本を臨書することは初めての経験であり、白く抜かれた文字を捉えることに戸惑いを覚えることと思われる。

教科書21ページ、131ページを参考に、拓本の概要について解説し、肉筆の書との違いや拓本の意義について理解させるとよいだろう。

用筆 POINT

伸びやかな点画

●中学校までの書写で学んだ運筆より起筆を軽くし、収筆も力まずに止めるとよい。送筆部分では穂先が点画の外側に出ないように配慮し、含みのある温和な線質になるように心がける。古典によって穂先の位置を調整しながら運筆することは、難しいため、基本的な点画をくり返し習うなど配慮が必要である。

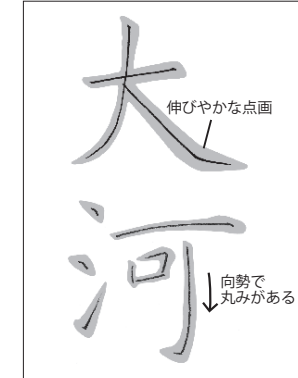
●右払い・曲がり・そりなどに長さと弾力性があり、伸びやかさや穏やかさを感じられることに気づかせたい。

●右払いは少しずつ筆圧を加え、長めに伸ばしてゆったりと払う。強調されているものは際だった長さになっている。

●はねのある線は、はね出しまでを長くゆつくりと運筆し、はね出す部分は短く直角方向にはね出す。

字形 POINT

向勢で丸みがある



●字形は向勢気味に構えているものが多く、全体に丸みを持たせている。向勢・背勢は、傾向の問題であり、一律にそのような文字の構えになっているわけではないことに注意が必要。

●転折は角張らせず、遠回りに運筆する感覚で丸みをもたせる。